



Bゼミ 『錯乱のニューヨーク』

著者：レムコールハース
訳者：鈴木圭介

ガイドライン

- ・序章 p. 7-p.14
- ・前史 p.15-p.42
- ・第I部 p.43-p.132 「コニーアイランド」
- ・第II部 p.133-p.270 「ユートピアの二重の生活」
- ・第III部 p.271-p.388 「完璧さはどこまで完璧でありうるか」
- ・第IV部 p.389-p.466 「用心シロ！ダリとルコルビジェがニューヨークを征服する」
- ・第V部 p.467-p.484 「死シテノチ（ポストモルテム）」
- ・補遺 p.485-p.518 「虚構としての結論」
- ・訳者あとがき p.537-p.545

序 章 p. 7-p.14

マンハッタンのための回顧的なマニフェストの書であり、マンハッタンを定式化されない理論、すなわちマンハッタニズムとして解釈を試みるという目的により出版された。二十世紀の近代マンハッタンを対象としており、「コニーアイランド」「摩天楼」「ロックフェラーセンター」「2人のヨーロッパ人」の計4部をマンハッタンの暗示的原理として年代記的に記述。第5部「補遺」では、明示的原理へ転化し一連の建築プロジェクトを論じている。

訳者あとがき p.537-p.545

マンハッタンの摩天楼が「建築史上初めて自らの意思で乱舞する建物(p537 l.8)」や「史上初めての非政府的非宗教的モニュメント(p537 l.11)」と言及しており、どの都市より先端的かつ異質な性質を孕んでいることが伺える。それは心理的な要因も何らかの形で反映しているとされ、大衆によって無意識に維持される欲望が、巨大なエネルギーとして上方方向に高密度なモニュメントを維持し「過密の文化（大衆的欲望）」を形成している。それら過密の文化を支えるものには、「最大限の経済性・利益・効率・速度・利便・娯楽・生活における体験の多様性」といった一種の欲望を追求することで成り立つと見ている。

議題

・ [「マンハッタンは、建築のエクスタシーというものを一貫して与え続けた(p11 l.2)」と言っているが、コールハースは何を念頭にエクスタシーを建築に対して感じていたのだろうか？]

・ [マンハッタンの空間原理は空間の最大効率化をめざす「過密」の論理に基づいており、これは建築の外部と内部の分裂・古典的建築手法の無効化・建築的操作により管理できないといった『S, M, L, XL』で提唱した「ビッグネス」と一貫した内容となっている。では、コールハースは異常なまでに過密化し、ビッグネスという問題を引き起こしたとされるマンハッタニズムをアーバニズムのイデオロギーと捉えたのか？(p11 l.6)]

(過疎やスモールネスはアーバニズムとしてうまく成り立たない？)